

人間と労働

田 口 幸 一

はじめに

「働こうとしない者は、食べることもしてはならない」。この言葉は、新約聖書「テサロニケ人への第2の手紙」のなかの一句として有名であるが、ここには、次の二つのことが示されている。一つは、労働は人間にとって生きるための手段であること、もう一つは、労働は労苦であること、それである。これが西欧の古くからの労働観であり、それが近代まで受け継がれてきたのである。しかし、これに対し、マルクスやフーリエ、カベなどの社会主義、共産主義者たちは、労働を労苦としてとらえるのではなく、労働が喜びとなる社会を構想したのである。マルクスにおいては、労働そのものが第一の生命欲求となる社会さえも構想しているのである。本稿は、こうしたフーリエ、カベおよびマルクスの構想について考察しようとするものである。

フーリエの「ファランジュ」構想と「魅力的労働」論

フーリエは約15年間をリヨンで過ごしている。五島茂・坂本慶一『ユートピア社会主義の思想家たち』によれば、「フーリエは、彼自身のそれまでの生活経験に加えて、商工業都市リヨンの活動的な雰囲気、それがかかえている経済的、社会的諸矛盾と労働者のミゼラブルな生活（1日18時間の労働、食事の時間は15分かそれ以下など 引用者）から、次第に独自の思想的世界を構築していったものと思われる」¹⁾

とされている。

さて、フーリエの情念引力の思想によれば、人間の本性は情念にあり、その情念には12種類あり、理性は情念の下位にあって、それに協力すべきものとされる。つまり、「人間の本性である情念に即応した生活および生産集団を組織すれば、人々は生産労働においてすら、苦痛どころか満足を感じ、遊びと労働との区別は消滅し、しかも人々は遊びのような喜びのうちに生産力を飛躍的に増大させることになる」とフーリエは考える²⁾のであり、「要するに、フーリエは、自然界あるいは物質界において、ニュートンの発見した万有引力の法則が作用しているように、人間社会には情念引力の法則が貫かれていると確信し、この法則に沿って文明社会を変革するならば、神の望み給う人間の完全な幸福が実現されるにちがいないと考えるのである」³⁾。

労働にたいする嫌悪感が取り除かれ、魅力ある労働が実現される社会が、「ファランジュ」という名の理想社会である。「ファランジュは、古代マケドニア軍の方陣ファランクスから取った名で、最小400人、最大2000人、平均1620人の老若男女と、1人当たり1ヘクタールの農地をもった、生産と消費にわたる生活協同体で、ファランジュの住民は、ファランステールとよばれる広大な共同宿舎で生活する。ファランジュは、住民の12種の情念がことごとく満足されるよう、生産と消費の全般にわたってこまかい配慮がなされている」⁴⁾。

では、労働を魅力的なものにするにはどのような方策が必要か。それは、フーリエのファラ

ンステール論を手際よくまとめあげていると評価されるフーリエ派フォレの『労働の組織化、フーリエの理論にもとづく』で、以下のように提示されている。

「労働が嫌悪感を催すものであり、私が明らかにしてきたように、労働が7つの根本的欠陥（仕事場が汚く非衛生的なこと、労働者の孤立、労働の未分業状態、連続就労、謀議や競争心の欠如、栄誉の欠如、社会的行為への加担の欠如）に染まっていることからして、労働を魅力的なものとするには、これらの欠陥のすべてを除去しなければならない。したがって私が提示しなければならないのは、ファランステールという環境のなかで労働は、(1)優雅な仕事場もしくは場所で、(2)労働者の集団ないし集合体によって、(3)可能なかぎり推し進められた分業状態において、(4)短時間就労によって、(5)競争心を煽り立てる謀議の力で、(6)栄誉に駆られて、(7)フーリエが単一主義と呼んだ情念の影響のもとで、また各個人が自己の個別的労働が全体的行為に加担していることを望むことのおかげで 要するに、今日の諸条件とは正反対の諸条件のなかで 行なわれるということである」⁵⁾。

次いでフォレは(1)から(7)の条件(方策)をそれぞれ具体的に展開していくのであるが、とりわけ興味深いのは、短時間就労が魅力的労働の実現の根本条件とされていることである。すなわち、フォレはまず「短時間就労がなければ労働はけっして娯楽と同義語になりはしないであろう」と述べ、短時間就労の魅力的労働の実現に果たす決定的役割を強調する。そして、次のように述べる。

「必要な、あるいは有用な業務や職務のすべてが、ファランジュにおいては極限にまで分業が推し進められ、また、かなり多数の集団によって遂行されているがゆえに、労働あるいは日常的業務の個々の部分 一つの集団がこれを引き受ける が2時間以内で成し遂げられると想像することは容易である。さらに、たとえば小麦や干し草の収穫といった、より長い

時間を必要とするようないくつかの労働についても、仕事に着手する集団の後を、その仕事を終えることを担当する他の集団に引き継がせても何ら差支えはあるまい。こうして、同じ一日のうちに、ファランステールの住民の一人ひとりが、少なくとも2時間ごとに仕事を変え、多大の労力を必要とする労働からあまり労力を必要としない仕事へと、手仕事から頭脳労働へと移ること、要するにきわめて活発であると同時に、きわめて多様かつ変化に富んだ生活を送ることが可能となる。これは、けっして倦怠を感じないようにする素晴らしい手段であり、また、重荷を振り払うこともできずに、その重圧のもとで苦しみ呻くように、一生涯忍従する羽目にけっして追い込まれないようにする手段である」⁶⁾。

以上がフォレの魅力的労働論の要点であるが、要するに、労働が嫌悪感を催すのは、一つには、労働が行なわれる「環境」、もう一つには、「労働の諸条件」に原因がある。したがって、環境を変え、その原因を除去すれば、労働は娯楽・快楽へと転化する。フーリエの言葉でいえば、労働は「今日の祝宴や芝居と同じくらいに魅力的なもの」⁷⁾となる。

西欧的労働観においては、労働は苦痛であり、労働は目的である快楽・余暇のための手段とのみとらえられてきた。この意味において、労働が快楽となり、娯楽となるという魅力的労働論は、西欧的労働観に真っ向から挑戦するものであった。

カベの労働観

共産主義者カベの理想社会は、トマス・モアの『ユートピア』に着想を得て著された『イカリヤ旅行記』に描かれた「イカリヤ共和国」である。この共和国は、共有制を基礎として組織された平等社会であり、ここでは、すべての産業と工場は国有である。

「すべての人は、国家の労働者であり、共和国のために働いています。すべての人は、男性

も女性も、例外なく、法律によって定められたさまざまな仕事、つまり生業、つまり職業のうちのいずれか一つをはたしています。

子どもは、男の子の場合は18歳、女の子の場合は17歳になってようやく働き始めます。少年時代は、子どもの体力を発達させ、教育を行なうために費やされるからです。老人は、男性の場合は65歳、女性の場合50歳で労働を免除されます。しかし労働は、疲労が少なく、快適ですらあるので、慣れた職業をそのまま続けるか、あるいはその他のさまざまな方法で働くか、いずれにしても免除を求める老人はいません⁸⁾。

このように、この共和国では、すべての人は国家の労働者であり、法律で定められたどれか一つの職業に従事している。ここでは、誰も労働を嫌がる人はおらず、むしろ定年がきても仕事を続けたいと思うほど労働は魅力的なものとなっている。それは労働が「疲労が少なく、快適」なものになっているからである。それでは、ここではなぜ労働が快適で、疲れ知らずになっているのか。それについて、次のように説明される。

「機械は限りなく増加され、いまでは2億匹の馬あるいは30億人の労働者の肩代りをする水準に達しています。そして危険な労働、骨の折れる労働、非衛生的な労働、あるいは不潔で不快な労働は、すべて機械が行なっています。[中略]

つぎのようなことがすべて労働を快適なものにするのに貢献しています。教育が子どものときから労働を愛し、高く評価するよう教えていること、工場が清潔で便利なこと、労働者大衆を元気づけ、楽しませる歌が認められていること、労働がすべての人に平等に課せられ、労働時間が適度なものであること、世論があらゆる労働を名誉なものとしており、しかもすべての労働に平等の栄誉を与えていることがそれです⁹⁾。

ここには、労働を快適で、疲れ知らずとするためのさまざまな方策が示されている。中でも興味を引くのは、危険、骨の折れる、非衛生的、

あるいは不潔で不快な労働はすべて機械に代替するという方策である。ここには、労働には快適で、疲れ知らずになりうるものとなりえないものがある、というカベの労働観が表されている。次に、労働時間と時間短縮の問題についてのカベの考えを見てみよう。

「最初10時間から18時間におよんだ労働時間は、その後徐々に短縮されて、今日では、夏は7時間、冬は6時間に、つまり朝の6時あるいは7時から午後1時までと定められています。労働時間はこれからも短縮されるでしょう。あたらしい機械が労働者と入れ替わるようになって、あるいはまた製造の必要性（たとえば建造物の必要性）が減少し、多数の労働者が不要になることによって、可能になった分だけ、労働時間の短縮が行なわれるでしょう。しかし、労働時間はたぶんもう最小限度に達しているものと思われます。というのは、われわれはたえず楽しみを増加させる努力を続けてゆくわけですから、たとえある産業が減少したとしても、それにとって代わる別の新しい産業が現われてくるからであります¹⁰⁾。

まず、労働時間は6～7時間が適度な時間であり、時間帯としては早朝に開始し、午後1時には仕事を終わるとされている。次に、労働時間の短縮については、それは労働が快適なものになる諸条件の一つであるが、だいたいこの6～7時間あたりが限度とされている。つまり、仕事は早く終わるにしても、午後1時ぐらいが限度であろうというものである。

最後に、怠惰の問題については、この国では怠惰が窃盗と同じように不名誉なこととされているだけでなく、労働が快適になっているがゆえに怠け者はいないとされる。この点は、労働を娯楽・快楽に転化することが怠惰の矯正手段であるとしたフーリエの考え方と共通するものがある¹¹⁾。

マルクスと労働の解放

1. マルクスの労働のとらえ方と共産主義社会像

マルクスの労働のとらえ方の特徴の一つは、労働を人間の「正常な生命活動」としてとらえる点にある。マルクスは、『資本論』第1巻第1章「商品」第2節「商品に表される労働の二重性」の末尾において、「すべて労働は、一面では、生理学的意味での人間的労働力の支出であり、同等な人間的労働または抽象的人間的労働というこの属性において、それは商品価値を形成する。すべての労働は、特殊な、目的を規定された形態での人間的労働力の支出であり、具体的有用的労働というこの属性において、それは使用価値を生産する」¹²⁾と述べるとともに、この箇所に、次のような注を付している。

『労働だけが、それによってすべての商品の価値が、あらゆる時代を通して、評価され、比較されうる究極の、真の尺度であること』を証明するために、A・スミスは、次のように言う。『等しい量の労働は、あらゆる時代、あらゆる場所において、労働者自身にとって等しい価値をもっているに違いない。労働者は、彼の健康、体力、および活動の正常状態のもとで、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、自分の安楽、自分の自由、および自分の幸福の同一部分をつねに犠牲にしなければならない』。A・スミスは、一面では、この場合（どこでもというわけではないが）、商品の生産に支出される労働の分量による価値の規定を、労働の価値による商品価値の規定と混同しており、したがって、等量の労働はつねに等しい価値をもつということを証明しようとしている。他面では、彼は、商品価値に表される限りでの労働が、ただ、労働力の支出としてのみ通用するというところにうすうす感じているが、この支出を、ふたたび単に安楽、自由、および幸福の犠牲としてのみとらえ、正常な生命活動とはとらえていない。いずれにせよ、彼は近代的賃金労働者を眼前にしているのである¹³⁾。

見られるように、マルクスは、まず、スミスが労働を安楽、自由、および幸福の犠牲としてとらえるだけではなく、商品の生産に支出される労働の分量についても、それをふたたび安楽、自由、および幸福の同一部分の犠牲としてとらえていることを指摘するとともに、次いで、この支出は労働力の支出としてのみ通用すること、そして、この労働力の支出は、人間の正常な生命活動としてとらえられねばならないと述べているのである。

ところで、労働を手段としての労苦（したがって安楽、自由、および幸福の犠牲）としてとらえるのとらえ方は、西欧的労働観といえるものである。杉村芳美氏は、このような労働観における労働の意味について、労働時間短縮の意義と関連させながら、次のように述べている。

「労働時間の短縮をめざすことのなかには、労働は余暇活動を含む快樂のための苦痛であり、目的にたいする手段、成果を得るための費用であって、できるだけ少ないことが望ましく、なしですませるにこしたことはないという受けとめ方が明らかにある。労働を手段としての苦痛とみなすのは、経済学へと引き継がれる西欧的労働観と考えられる。労働は神の呪いとしての労苦であるとするプロメテウス神話や樂園追放物語にまでさかのぼれるかは別にして、一般に労働のこの手段視、苦痛視が西欧での労働時間短縮の動きの背後にあるとされてきた。

労働が手段としての苦痛であるということは、労働には手段としての意味しかないことである。手段は目的に依拠し、手段自体に積極的な意味はないということである。目的である快樂・余暇の追求に意味があり、苦痛・労働は回避されるべきものとなる。快樂・余暇はなるべく多く、苦痛・労働はなるべく少なくという意識は、労働時間の短縮論とともに強化されることになるだろう¹⁴⁾。

このように、西欧的労働観においては、労働は手段としての労苦としてとらえられる。これに対して、マルクスの労働観においては、労働とは人間的労働力の支出であり、そして、この

支出こそは人間の正常な生命活動にほかならないとするのである。マルクスは、このことを次のように述べている。

「労働は、まず第一に、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とのその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である。人間は自然素そのものに一つの自然力として相対する。彼は、自然素材を自分自身の生活のために使用しうる形態で取得するために、自分の肉体に属している自然諸力、腕や足、頭や手を運動させる。人間は、この運動によって、自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させる。彼は、自分自身の自然のうちに眠っている潜勢諸力を発展させ、その諸力の働きを自分自身の統御に服させる」¹⁵⁾。

さて、このように、労働を人間的労働力の正常な精神のおよび肉体的活動としてとらえるところに、マルクスの労働のとらえ方の特徴の一つを見ることができるのであるが、次の点にもう一つその特徴を見ることができる。それは、労働が労働者を魅了したり、労働者が労働に喜びを見ることがあるととらえる点である。たとえば、建築師の労働について、マルクスは次のように述べている。

「労働の全期間にわたって、労働する諸器官の緊張のほかに、注意力として現われる合目的な意志が必要とされる。しかも、この意志は、労働がそれ自身の内容と遂行の仕方によって労働者を魅了することが少なければ少ないほど、それゆえ労働者が労働を自分自身の肉体的および精神的諸力の働きとして楽しむことが少なければ少ないほど、ますます多く必要となる」¹⁶⁾。

以上、マルクスの労働のとらえ方について見てきたが、次に、マルクスは、将来社会において労働をどのように展望していたかを見てみたい。ただ、マルクスの場合、フリーエやカベたちとは違って、将来社会における労働の姿を詳細に描くことをしていない。このため、われわ

れは、マルクスが断片的に書き記したものに頼らざるをえないのであるが、初期の『ドイツ・イデオロギー』では、それが次のように描かれている。

「各人がどんな排他的な活動範囲をももつことがなく、どんな任意の部門でも腕をみがくことができる共産主義社会にあつては、社会が全般の生産を規制し、まさにそのことによって私に、今日はこれ、明日はあれをする可能性を与えてくれる。つまり狩人、漁師、牧者または批判者になるなどということなしに、私の気のおもむくままに、朝（あした）には狩りをし、午（ひる）すぎには魚をとり、夕（ゆうべ）には家畜を飼い、食後には批判をする可能性である」¹⁷⁾。

ここでは、個人が分業に隷属することがなくなった姿が描かれている。そして、「気のおもむくままに」という言葉に見られるように、労働において強制や束縛を受けることのない、自由な労働が描かれている。

次は、後期の『ゴータ綱領批判』であるが、ここでは、共産主義社会が低い段階と高い段階に分けられ、そして、その高い段階における労働の姿が次のように描かれている。

「共産主義社会のより高度の段階で、すなわち個人が分業に奴隸的に従属することがなくなり、それとともに精神労働と肉体労働との対立がなくなったのち、労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求となったのち、個人の全面的な発展にともなう、また、その生産力も増大し、協同的富のあらゆる泉がいつそう豊かに湧きでるようになったのち、そのときはじめてブルジョア的権利の狭い視界を完全に踏みこえることができ、社会はその旗の上にこう書くことができ、各人はその能力におうじて、各人にはその必要におうじて！」¹⁸⁾。

見られるように、共産主義社会の高い段階においては、労働そのものが第一の生命欲求となるというのである。

ところで、マルクスは、『資本論』第1巻第

1章「商品」第4節「商品の物神的性格とその秘密」において、「商品生産の基礎上で労働生産物を霧に包む商品世界のいっさいの神秘化、いっさいの魔法妖術は、われわれが別の生産諸形態のところに逃げ込むやいなや、ただちに消えうせる」と述べ、そして、この「別の生産諸形態」の一つとして、次のような生産形態を例示する。

「経済学はロビンソン物語を好むから、まず孤島のロビンソンに登場ねがおう。生れつきつましい彼ではあるが、それでもさまざまな欲求を満たさなければならず、それゆえまた、道具をつくり、家具をこしらえ、ラマを馴らし、魚をとり、狩りをするといったさまざまな種類の有用的労働を行わなければならない。祈祷やこれに類することは、ここでは問題にしない。なぜなら、わがロビンソンは、それに喜びを見だし、この種の活動をくつろぎとみなしているからである。彼の生産的機能はさまざまに異なっているけれども、彼は、それらの機能が同じロビンソンの相異なる活動形態にほかならず、したがって、人間的労働の相異なる様式にほかならないことを知っている。彼は、必要そのものに迫られて、彼の時間を彼のさまざまな機能のあいだに正確に配分しなければならない。彼の全活動のなかでどの機能がより大きい範囲を占め、どの機能がより小さい範囲を占めるかは、所期の有効効果の達成のために克服されなければならない困難の大小によって決まる。経験がそれを彼に教える。そして、わがロビンソンは、時計と帳簿とインクとペンとを難破船から救い出しているのだ、立派なイギリス人らしく、やがて自分自身のことを帳簿につけ始める。彼の財産目録には、彼が所有する諸使用対象と、それらの生産に必要とされるさまざまな作業と、最後に、これらのさまざまな生産物の一定分量のために彼が平均的に費やす労働時間との一覧表が含まれている。ロビンソンと彼の手製の富である諸物とのあいだのすべての関連は、ここではきわめて簡単明瞭であって、M・ヴィルト氏でさえ、とりたてて頭を痛める

ことなしに理解できたほどである。にもかかわらず、そこには、価値のすべての本質的規定が含まれているのである」¹⁹⁾。

見られるように、ここで、マルクスは、労働に喜びを見だし、さらにそれを「くつろぎ」とみなしているロビンソンを描いている。ここには、ロビンソンにおいて労働が第一の生命欲求となっているかどうかは語られてはいない。しかし、「祈祷やこれに類することは、ここでは問題にしない。なぜなら、わがロビンソンは、それによるこび見だし、この種の活動をくつろぎとみなしているからである」という言い方は、労働そのものが彼の第一の生命欲求となっているととらえることを可能とする。というのは、ここでは、労働はロビンソンに喜びを与えるだけでなく、「くつろぎ」も与えるという役割・機能を併せ持っているものであり、それを、今ここで、労働の多面的機能とでも呼ぶとするならば、この機能は、たとえば運動としての機能、遊びとしての機能というように、さらに多様化していく可能性をもっている。このようにして、ロビンソンにとって労働はますます魅力的なものになってゆき、やがて労働が彼の第一の生命欲求となってゆくと考えることができるからである。また、このような労働の多面的機能という視点は、将来の労働を展望するうえだけではなく、今日の労働を考えるうえでも、重要な視点であるといえよう。いずれにせよ、ロビンソンが労働に喜びを見だしていることだけは確かであり、さらにまた、それを「くつろぎ」とみなしていることも確かである。この意味において、ロビンソン像は、『ゴータ綱領批判』で描かれている共産主義社会の人間像、すなわち労働そのものが第一の生命欲求となるという人間像とかなり重なり合う部分をもっているのである。また、このロビンソンの社会像は、個人が分業に奴隷的に従属することがなく、さらに精神労働と肉体労働との対立もなくなっているという点でも、マルクスの共産主義社会像と重なり合う（ロビンソンが彼の時間を彼のさまざまな機能のあいだに正確に配分するための

作業は、精神労働ととらえられよう。また、このロビンソンの社会像は、マルクスが「資本主義的生産様式の止揚後も、しかし社会的生産が維持されていれば、価値規定は、労働時間の規制、およびさまざまな生産群のあいだへの社会的労働の配分、最後にこれについての簿記が、以前よりもいっそう不可欠なものになるという意味で、依然として重きをなす」²⁰⁾と述べているように、「価値規定」の運用という点でも、マルクスの共産主義社会像と重なり合っている。つまり、ロビンソンの社会像は、マルクスが『ゴータ綱領批判』で描くところの高い段階の共産主義社会像と本質的部分で重なり合っているものであり、したがって、われわれは、このロビンソン像を、労働が喜びとなっているだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求ともなっている人間像としてとらえることができるのではないか、ということである。

2. 「労働が第一の生命欲求となる」ということの意味と意義

すでに見たように、マルクスは、共産主義社会の高度の段階では、労働そのものが第一の生命欲求となるとしている。では、それは、どのような意味と意義をもつものであろうか。この問題について、マルクスは、『資本論』第3巻第48章「三位一体的定式」において、次のように述べている。

「自由の王国は、事実、窮迫と外的な目的への適合性によって規定される労働が存在しなくなるところで、はじめて始まる。したがってそれは、当然に、本来の物質的生産の領域の彼岸にある。野蛮人が、自分の諸欲求を満たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないように、文明人もそうしなければならない。しかも、すべての社会諸形態において、ありうべきすべての生産諸様式のもとで、彼〔人〕は、そうした格闘をしなければならない。彼の発達とともに、諸欲求が拡大するため、自然的必然性のこの王国が拡大する。しかし同時に、この諸欲求を満たす生

産諸力が拡大する。この領域における自由は、ただ、社会化された人間、結合された生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって盲目的な支配力としてのそれによって支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち、最小の力の支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行なうこと、この点にだけありうる。しかしそれでも、これはまだ依然として必然性の王国である。この王国の彼岸において、それ自体が目的であるとされる人間の力の発達、真の自由の王国が　　といっても、それはただ、自己の基礎としての右の必然性の王国の上にのみ開花するのであるが　　始まる。労働日の短縮が根本条件である」²¹⁾。

まず、労働が第一の生命欲求となることの意味について見てみよう。それは、まず第一に、労働が窮迫と外的目的の強制を受けずに行なわれるようになること、換言すれば、労働が自己目的的活動として行なわれるようになることである。第二は、労働が自己目的的活動になることにおいて、労働がはじめて自由を獲得することである。第三は、この自由は、必然性の王国における唯一の自由＝「社会化された人間、結合された生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって　　盲目的な支配力としてのそれによって　　支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち、最小の力の支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行なうこと」を基礎として、はじめて獲得されるということである²²⁾。

次に、労働が第一の生命欲求となることの意味である。すでに見たように、A・スミスは、労働を「安楽、自由、および幸福の犠牲」としてとらえた。これに対し、マルクスは、労働を正常な生命活動としてとらえた。そして、マルクスの労働のとらえ方においては、労働が

第一の生命欲求となることにおいて、労働は自由を獲得する。さらに、労働は、単に自由のみならず、「安楽」や「幸福」をも獲得するであろう。なぜなら、この場合、労働は「人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件」のもとで行なわれるのであり、また、それは芸術やスポーツ、娯楽などに優る、やらずにおれないもの・味わい楽しまずにはおれないものとなっているからである。こうして、共産主義社会の高度の段階において、労働は自由となり、安楽となり、および幸福ともなる。ここに、われわれは、労働そのものが第一の生命欲求となることの意義を見るのである。

3. 共産主義社会と「生活のための手段としての労働」

すでに見たように、『ゴータ綱領批判』においては、共産主義社会の高度の段階において、「労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求とな〔る〕」とされている。そこで、最後に、マルクスは、この生活のための手段としての労働そのものについてはどのようにとらえていたかを見ておこう。

まず、マルクスは、共産主義社会を「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会」としてとらえている。そして、この社会では、「個々の労働は、もはや間接にではなく直接に総労働の構成部分として存在している」から生産物の交換は行なわれないとされ、次のように述べる。

「ここで問題にしているのは、それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではなくて、反対にいまようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。したがって、この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、その共産主義社会が生まれでてきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている。したがって、個々の生産者は、彼が社会にあたえたのと正確に同じだけのものを 控除をしたうえで 返してもらう。個々の生産者が社会にあたえたものは、彼の個人的労働量

である。たとえば、社会的労働日は個人的労働時間の総和からなり、個々の生産者の個人的労働時間は、社会的労働日のうちの彼の給付部分、すなわち社会的労働日のうちの彼の持ち分である。個々の生産者はこれこれの労働（共同の元本のための彼の労働分を控除したうえで）を給付したという証明書を社会から受け取り、この証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい量の労働が費やされた消費手段を引きだす。個々の生産者は自分が一つのかたちで社会にあたえたのと同じ労働量を別のかたちで返してもらうのである」²³⁾。

ここでは、資本主義から生まれたばかりの共産主義社会のもとにおける、生活のための手段としての労働について述べられている。見られるように、ここにおいて労働は、消費手段を手に入れるための手段としてだけではなく、その入手しうる消費手段の量の尺度としても機能する。ちなみに、共産主義の高度の段階においては、前に見たように、能力におうじて働き、必要におうじて受け取るわけであるから、この場合、労働は単に消費手段を入手するための手段としてのみ機能する。

次に、問題の生活のための手段としての労働そのものの性格について見ておこう。この問題について、マルクスは、『資本論』第1巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」において、次のように述べている。

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、それゆえ資本主義的な私的所有は、自分の労働にもとづく個人的私的所有の最初の否定である。しかし、資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代の成果 すなわち、協業と、土地の共同占有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共同占有 を基礎とする個体的所有を再建する」²⁴⁾。

見られるように、ここでは、資本主義的生産・取得様式に代わる共産主義的生産・取得様

式が、生産手段の共同占有を基礎とする個体的所有の再建という形で語られている。そこで、われわれは、この「共同占有」という言葉に注目することになるわけであるが、マルクスは、その意味について、「フランス労働党の綱領前文」において、次のように述べている。

「生産階級の解放は、性や人種の差別なしに、すべての人間の解放であること、生産者は生産手段を占有する場合にはじめて、自由でありうること、生産手段が生産者に所属することのできる形態は、次の二つしかないこと、

- 1、個人的形態 この形態は普遍的な現象であったことは一度もなく、また工業の進歩によってますます排除されつつある、
- 2、集团的形態 この形態の物質的および知的な諸要素は、資本主義社会そのものの発展によって作りだされていく」²⁵⁾。

見られるように、マルクスは、「生産者は生産手段を占有する場合にはじめて、自由でありうる」と述べている。占有とは物を自分の意識的支配下におくことであり、したがって、生産者が生産手段を占有するということは、生産者が生産手段を自分の、あるいは自たちの意識的支配下におくことである。そして、この場合には、生産者あるいは生産者たちは、生産を自分自身のあるいは自分たち自身の勘定で自由に決定できることになり、この意味において、自由となりうるのである。そして、この場合、労働も生産者の意識的支配下におかれることになるがゆえに、その労働は、生産者のあるいは生産者たちの勘定のもとで行なわれることになり、この意味において、労働は自由となりうるのである。かくして、問題の共産主義社会における生活のための手段としての労働そのものの性格を規定するならば、それは、自由な労働としてとらえることができる。

さて、以上に見てきたように、まず、労働が第一の生命欲求として行なわれるようになると

き、その労働は自己目的的活動となり、その意味において「自由な労働」である。また、問題の生活のための手段としての労働も「自由な労働」としてとらえられた。しかし、両者の意味は相異なる。すなわち、『日本大百科全書』によれば、「自由はまず第一に強制や束縛を受けずに気ままにふるまえることを意味する。旅に出て自由を味わうといった場合の自由は、こうした『……からの自由』である」が、「自由は第二に、消極的な……からの自由」ではなくて、積極的な『……への自由』を意味する。哲学において選択や決断の自由とよばれるもので、古来この自由は自由意志の問題として論議されてきた²⁶⁾とされ、自由には「……からの自由」と「……への自由」という相異なる二つの意味があるとされている。このことから、両者の意味の相異は明らかである。すなわち、前者は「……からの自由」を意味し、後者は「……への自由」を意味するからである。こうして、共産主義の高度の段階において労働は、「……からの自由」と「……への自由」という二種類の自由な労働として存在する。しかし、それだけではなく、ここでは、労働が喜びともなり、安楽ともなり、および幸福ともなっているのであり、したがって、ここでは、労働が「安楽、自由、および幸福の犠牲」としてとらえられることは決してありえない。

最後に、このような自由論の観点からソ連「社会主義」をとらえるならば、ソ連「社会主義」は、マルクスがいう資本主義から生まれたばかりの共産主義社会（通常、社会主義社会と呼ばれる）に到達していなかったことが明らかである。なぜなら、そこでは、生産者が生産手段を占有しえておらず、したがって生産者が「……への自由」をもちえていないという意味で、生産者として自由になりえていなかったからである。そこでは国家が生産手段の所有者であり占有者であった。こうして、ソ連「社会主義」は、社会主義社会には到達することなく、しかも決してそこに到達することのない誤った方向（生産者に生産者としての自由を与えない

方向)に進むなかで崩壊していったといえよう²⁷⁾。

おわりに

人間にとって労働は生きていくための手段である。しかし、労働が苦痛で、つらいものであるならば、それはやりたくないもの、できるだけ避けたいものとなる。しかし、これまで見てきたように、フリーエの場合は、労働が魅力的労働になることによって、カベの場合は、労働が快適で、疲れ知らずになることによって、労働は楽しいものとなり、やらずにはおれないものになるとしたのである。マルクスの場合は、すでに見たように、もともとに労働は苦痛なものではなく、労働を正常な生命活動としてとらえるならば、労働とはもともとに「それ自身の内容と遂行の仕方とによって労働者を魅了する」という性質をもっているものであり、労働が「人間性にもっともふさわしい諸条件」のもとで行なわれるようになるとき、労働は第一の生命欲求となり、ここにおいて、労働は自由となり、安楽となり、および幸福ともなるとするのである。マルクスは、ここに、労働の解放の目標の一つを見ていたといえよう。

フリーエやカベ、およびマルクスはそれぞれに、労働が喜びとなり、楽しいものとなり、やらずにはおれないものになる社会組織と労働の諸条件を考えた。しかし、今日、そのような社会組織や労働の諸条件は実現していない。

今日の時代は、高失業時代と呼ばれている。生活のための手段としての労働という側面において、労働はまず、リストラや若者の高失業率などにもみられるように、厳しい環境のもとにおかれている。また、財界の正社員の削減と非正社員の増大化戦略のもとで、労働者の「不本意、不安定」雇用が増大している。さらに、生命活動としての労働という側面においても労働は、人員削減による過重労働、あるいは過労死などに見られるような厳しい労働の諸条件のもとにおかれている。そこでは、まさに労働は苦

痛で、つらいものとなっている。今日は、労働にとっては、生活のための手段としての側面においてだけでなく、生命活動としての労働の側面においても、厳しい環境・諸条件のもとにおかれているのである。われわれは、今日の、このような時代において、フリーエやカベ、およびマルクスなどの労働の解放の思想に再度目を向けてみる必要があるではなからうか。

注

- 1) 世界の名著42『オウエン、サン・シモン、フリーエ』中央公論社、1980年、67ページ。
- 2) 同上書、74ページ。
- 3) 同上書、75ページ。
- 4) 同上書、77ページ。
- 5) 河野健二編『資料フランス初期社会主義 二月革命とその思想』平凡社、1979年、125ページ。
- 6) 同上書、127-128ページ。
- 7) 前掲、世界の名著42、451ページ。
- 8) 前掲、河野健二編『資料フランス初期社会主義』、167ページ。
- 9) 同上書、167ページ。
- 10) 同上書、169ページ。
- 11) 前掲、世界の名著42、444ページ参照。
- 12) マルクス『資本論』、資本論翻訳委員会訳『資本論』第1分冊、79ページ。以下、『資本論』からの引用は、この邦訳に従い、その分冊数とページ数のみを記す。
- 13) 同上書、79-80ページ。
- 14) 杉村芳美『脱近代の労働観』ミネルヴァ書房、1990年、7ページ。
- 15) マルクス『資本論』、第2分冊、304ページ。
- 16) 同上書、305ページ。
- 17) マルクス=エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』、『マルクス=エンゲルス全集』大内兵衛・細川嘉六監訳(大月書店)、第3巻、29ページ。以下、この『全集』からの引用は、巻数とページ数のみを記す。
- 18) マルクス『ゴータ綱領批判』、第19巻、21ページ。
- 19) マルクス『資本論』、第1分冊、129-130ページ。
- 20) マルクス『資本論』、第13分冊、1490ページ。
- 21) 同上書、1434-1435ページ。

- 22) この問題については、有尾善繁「K・マルクスの労働本質論をめぐる今日のわが国での諸説について」(関西唯物論研究会責任編集『唯物論と現代』第27号, 2001年5月)を参照。
- 23) マルクス『ゴータ綱領批判』, 第19巻, 19-20ページ。
- 24) マルクス『資本論』, 第4分冊, 1306ページ。但し, 訳語を一部変更。
- 25) マルクス『フランス労働党の綱領前文』, 第19巻, 234ページ。
- 26) 小学館『日本大百科全書』, 443ページ。
- 27) 旧ソ連では, 1936年憲法(いわゆるスターリン憲法)で, 「ソ連における労働は, 『働かざる者食うべからず』の原則により, 労働能力をもつすべての市民の義務であり, 名誉である」と規定されていたが, 1993年のロシア連邦憲法では, 「1 労働は自由である。各人は自由に, 自らの労働能力を処分し, 仕事と職業の種類を選択する権利を有する。2 強制労働は, 禁止される」などと, 規定されている。

(2001年11月27日受理)